

尚絅学院大学女子短期大学部 共通教育英語教育実践報告(3)⁽¹⁾

—— 調音音声学的視点導入による英語音声分野リメディアル教育の効果⁽²⁾ —— 女子短期大学部英語リメディアル教育プログラム策定に向けて

勝畑 田鶴子・馬場 熙

レジュメ

本学女子短期大学部共通教育1年次必修科目「英語コミュニケーションⅠ」（前期週一回90分授業）は、2003年度より全学科（英文科を除く）共通の授業運営方法で実施している。特に、大学生としての英語運用能力養成を目的とした全学生共通コンピュータ利用教材の導入⁽³⁾は、本学入学試験の多様化等による学生の英語学力の大幅な違いに対応することを目的としていた。導入以来の授業結果から、高等学校までに習熟すべき英語学力が定着していない学生がかなりの割合見られ、大学英語教育の前提となるリメディアル教育（大学初年次英語学力不足者対象支援教育）の必要性が判明している。英語学力不足⁽⁴⁾は、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング各分野に見られるが、本稿では、学生の「英語」に関する意識調査に現われた、彼等が苦手と感じている英語音声分野に関する英文の聞き取りと英文の発音に限定し、学力不足原因の特定に関して高等学校までの英語学習歴を検証し、原因に基づき実践した、2005年度前期「英語コミュニケーションⅠ」のCAI仕様授業（ブレンデッド・ラーニング形式）（90分授業4回）への英語調音音声学⁽⁵⁾的視点導入（発音器官を使った英語発音プロセスの理解と理解に基づく実際の英語の発音）が、学生の英語音声分野に与えた効果について論じる。この実践結果に基づき、大学初年度早期に実施することが望ましい、高等学校卒業時に期待される英語学力支援授業に「大学英語教育を視野に入れた大学英語教育の教授法」をとり入れながら、短期間で効果的な英語音声分野リメディアル教育として、英語調音音声学的視点と英語音声表記（発音記号）導入徹底の提案をおこなう。

キーワード

英文リスニング、調音音声学、CAI、ブレンデッド・ラーニング、リメディアル教育

1. 序論

1.1 共通教育必修科目「英語コミュニケーションⅠ」全学科共通授業運営

2003年度全面実施の本学女子短期大学部カリキュラム共通教育必修科目「英語コミュニケーションⅠ」は、保育科では保育士と幼稚園教諭資格取得の一年間の必修科目であり生活創造学科では半期必修科目であることから、1年次後期に選択科目「英語コミュニケーションⅡ」を、あるいは2年次で「英語コミュニケーションⅢ、Ⅳ」を履修しない限り短期大学に於ける英語科目最終の履修となり、中学校から6年間継続してきた英語科目の総仕上げを意味する。よって、それぞれ半期または一年間の科目終了時に期待される英語力は「『英語が使える日本

(1) 女子短期大学部共通教育英語必修科目の全学科共通授業運営は尚絅女学院短期大学共通教育外国語教育推進協議会により提案され、2002年に実施開始された。

(3) コンピュータ教材利用は本学情報システムセンターの支援を受けて実施されている。情報システムセンター長木村清先生、ネットワーク管理アシスタント塩見さん、授業支援アシスタント高橋さんに感謝いたします。

人』の育成のための行動計画」(2003年3月文部科学省)によると短期大学「大学卒業レベルの英語力」は「仕事で英語が使える」英語力である。本学女子短期大学部では学生の入学時の英語力その他の状況から、全学科(英文科を除く)1年前期科目「英語コミュニケーションⅠ」の到達目標を上記行動計画で「『英語が使える日本人』育成の目標」の「中・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」ことの徹底としてきた。学生全員に共通の授業構成による授業運営で実施し、一部授業内で全学生共通C A I教材を使用する。これは大学入学までの学生個人の英語学習歴に対応し、かつ、大学英語教育各分野を網羅し、短期大学のグローバルスタンダードを指向する英語教育が目的で、具体的な授業構成は、クラスサイズすべてを25名～30名に、授業方法は、全学生が三種類の英語授業を4週間づつリレー形式で受講するというものであり、具体的プログラムはおおむね表-1の形式をとっている。

表-1 2005年度「英語コミュニケーションⅠ」授業内容クラス分け表例

2005年度「英語コミュニケーションⅠ」(生活創造学科1年・前期)授業スケジュール
A, Bクラス

時間割	クラス 出席番号	週												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
		4/13	4/20	5/11	5/18	5/25	6/1	6/8	6/15	6/22	6/29	7/6	7/13	7/20
		水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水
	A 1～21 (21名)	task-based タスク中心授業 ＜外国人教員担当＞				text-based テキスト中心授業 (英語の正しい使用法) ＜コンピュータ教材使用＞				content-based 内容中心授業 ＜日本人教員担当＞				テスト
水 4 限	A 22～36 + B 1～6 (21名)	content-based 内容中心授業 ＜日本人教員担当＞				task-based タスク中心授業 ＜外国人教員担当＞				text-based テキスト中心授業 (英語の正しい使用法) ＜コンピュータ教材使用＞				テスト
	B 7～27 (21名)	text-based テキスト中心授業 (英語の正しい使用法) ＜コンピュータ教材使用＞				content-based 内容中心授業 ＜日本人教員担当＞				task-based タスク中心授業 ＜外国人教員担当＞				テスト

このプログラム構成は受講学生が教養教育としての大学英語教育各分野を享受できるように、三種類の内容構成になっている。(A) 外国人教員担当によるコミュニケーション主体のタスク中心(task-based)授業、(B) 日本人教員担当による英語の背景となる英語圏の文化や文学等に関する内容中心(content-based)の担当者の専門分野に関する講義、(C) C A I (Computer Assisted Institution) 仕様(学内LAN利用)全受講学生共通教材使用の英語運用能力(英語の正しい使用法)習得のテキスト中心(text-based) e ラーニングを取り入れた授業となっている。プログラム立案に際して参考にしたのは(I)大学のカリキュラムとしての英語教育への要請として(a)「英語コミュニケーションⅠ」の授業設置学科(保育科、生活創造学科)より提案された各学科の専門教育の前提としての大学英語教育の授業方法と内容に対する要望、(b)2000年大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」で示された「1. グローバル化時代を担う人材の質の向上に向けられた教育の充実」のための改善方策としての「外国語によるコミュニケーション能力の育成」のための大学の外国語教育への要請、(c)他大学で実施されているグローバルスタンダードを指向した英

語教育に共通に見られる外国語のコミュニケーション型 (communicative) な教授法と受講学生の主体性の尊重 (learner-centered) の二点 (Ⅱ) 中学校高等学校で英語科目を学習してきた学生の外国語学習歴と連続性をもった大学英語教育の要請として、中学高校学習指導要領外国語 (英語科) の目標である「積極的にコミュニケーションを図る態度の育成と実践的コミュニケーション能力の涵養」の尊重であった。ただし、「コミュニケーション型」な授業方法⁶⁾の実践に関しては当面上記内容 (A) の外国人教員担当の授業での実現のみに限定し、(B) の講義と (C) の授業の説明は日本語でおこなうこととした (勝畑・馬場 2002 年)。

1.2 「英語コミュニケーションⅠ」受講学生の英語科に関する意識

毎年学期開始 1 時間目に「英語コミュニケーションⅠ」授業運営方法、内容解説に関するオリエンテーションと、英語に関する学生の意識調査と大学入学前英語学習歴に関するアンケートを実施した。学期最後の授業時には「英語コミュニケーションⅠ」の授業方法と授業内容に関する授業評価アンケートを実施し学生の授業に対する意識実態把握に努め、かつ、使用共通教材に関する全クラス同一内容テストを実施して授業内容と方法の検証と改善にあたってきた (例：2003 年度から英語リスニング能力向上の方策として英語スピード対応力養成を目的とするシャドーイング (shadowing) 導入授業実施。 (勝畑・馬場 2003 年))

2005 年度授業開始前に実施したアンケートによる受講学生自身が考えている英語学習目的の上位 3 項目は次のようなものであった (学生数 308 名)。

1. あなたは英語を勉強してどのようなことができるようになりたいですか？ (自由記述方式)

- | | |
|----------------------------------|-----|
| ・外国の人と不自由なく楽しく自信を持ってコミュニケーションしたい | 32% |
| ・海外で標識などをきちんと読んだり、現地の人との会話に役立てたい | 10% |
| ・簡単な日常会話を普通に話したい | 9% |
| ・解答なし | 28% |

英語学習の目的を、約半数の学生は英語によるコミュニケーションの実現 (コミュニケーションそのものを行うこと) と答えている。しかし、3 分の 1 を占める「不自由なく自信を持ってコミュニケーションしたい」という願望は、中学校高等学校 6 年間の「コミュニケーション主体の英語教育 (1989 年度改訂英語学習指導要領)」の結果学生が自由に自信を持って英語でコミュニケーションできていない現実を表わしているとも考えられる。また、3 分の 1 に近い学生が学習目的に無解答であることは、「英語」の授業への動機付けがかなり低い現実を表わすと考えられる。

英語の得意分野について学生自身はどのように考えているかについて、

2. あなたの英語の得意な順番を書いてください。(選択肢方式)

- | | |
|--------------------|-----|
| ・リーディングを 1 位とした者 | 50% |
| ・ライティングを 1 位とした者 | 17% |
| ・スピーキングを 1 位とした者 | 16% |
| ・リスニングを 1 位とした者 | 14% |
| ・英語はどの分野も嫌いとしき込んだ者 | 3% |

自分で得意と思える英語分野の順番に関しては、リーディングを得意と感じている者が半数にのぼり、音声分野を得意と感じる者が非常に少ない。これは 2005 年度に限らず毎年アンケートに同様にあらわれてきた傾向であった。英語コミュニケーションに重点を置く学習指導要領改訂から 15 年以上が経過し、様々なメディア機器が英語教育現場に導入され、授業に A L

Tが活用されている状況におけるこのような結果の原因となる実態を把握することにより英語力不足の状況の改善方法を提案することが可能となろう。

2. 英文発音のメカニズムに基づく効果的英語音声指導

2.1 英単語の単独発音と英文中における発音の違い

同一の英単語でも、単独で発音される場合の発音 (isolated) と、ノーマルスピードで発音される英文 (connected speech) の中で発音される場合では聞こえ方が非常に異なることは、音声学者による英語発音の記述に基づく英語発音メカニズムの観点から、また、英語教育実践者の両者により指摘されてきたところである。英文レベルに生じる具体的音変化には、弱化 (weak form)、縮約化 (contraction) に加え、連結 (linking)、同化 (assimilation)、脱落 (elision) がある⁽⁷⁾。

B. Collins, I. M. Mees は実践的英語音声学の著書 *Practical Phonetics and Phonology* で英文発音に弱化と縮約化の著しい特徴があることを次のように指摘している。

All languages modify complicated sequences in connected speech, in order to simplify the articulation process—but the manner in which this is done varies from one language to another. (p.101 下線筆者、以下同様)

Among the languages of the world, English is remarkable for the number of its weak and contracted forms and the frequency of their occurrence. (p.19)

この英文発音に表われる特徴は英語音の調音音声学的知識により習得が容易になること、英文の発音特徴の習得は、特に非母国語話者 (non-native learners) にとって英文聞き取り能力の向上にも効果があることを指摘している。

If you're a non-native learner, it (the study of phonetics) will also assist in improving your pronunciation and listening abilities. (p. 2) (括弧内は筆者付加)

また、非英語母国語話者に習得困難なこの英文発音の音変化は、音声による英語コミュニケーションを英語圏で効果的に遂行するためには必要性が非常に高いと述べている。

If you're a non-native learner of English, remember that weak and contracted forms are necessary for anyone with the goal of approaching fluent native-speaker English. (p.17)

Using them appropriately doesn't come easily to non-native learners. (p.19, l.3～4)

Again, as a non-native, you will usually not be misunderstood, but it will certainly make your English sound less effective. (p.19, l.10～11)

長年非英語圏学生へ英語教育を実践している Carolyn Graham は *Jazz Chants Old and New* で次のように述べ、英単語単独の発音と極端に異なる英文中で発音される音変化を受けた英語発音法を習得することが、発音のみならず英文の聞き取り (リスニング) に役立ち、英語圏における英語母国語話者とのコミュニケーションに必須であることを強調している。Graham はその経験をもとに英文のリズムとジャズのリズムをダイナミックに組み合わせたユニークな英語発音教授法「ジャズ・チャンツ」を考案し、英語の単語のレベルを超えた単位での発音教授法として推奨している。

American English stretches, shortens, blends and often drops sounds. These subtle features of the language are extremely difficult for a student to comprehend unless his ear

has been properly trained to understand the language of an educated native speaker in natural conversation. The sound of "Jeet yet?" is meaningless unless one has acquired the listening comprehension skills necessary to make the connection with "Did you eat yet?" Jazz Chants are particularly useful in developing these listening comprehension skills. (p.vii)

指摘されている英語の語の範囲を超えた英文レベルに表われる英語の発音変化の効果的指導方法に関して、Gimsonは*Pronunciation of English*で、成人の非母国語話者に対する外国語指導法には単なる英語音の模倣だけでなく音声学的知識に基づく効果的指導が必要であることを指摘している。

As we grow older, the acquisition of a new language will normally entail a great deal of conscious, analytical effort, instead of children's ready and facile imitation. (p. 7)

B. Collins, I.M. Meesは英文発音における音変化の発音プロセスに関しては、母国語話者であっても気付いていない場合があることを次のように指摘している⁽⁸⁾。この点は、英語の音声指導にALTを活用する場合には注意しておく必要があるだろう。

Furthermore, most native speakers are totally unaware of such simplification process and are often surprised (or even shocked!) when these are pointed out to them. (p. 101)

2.2 英語科学習指導要領（文部科学省）における音声指導

本学1年生の中学校での英語教育は中学校3年間、平成元年改訂学習指導要領に準拠しておこなわれていた（現行の平成11年改訂新学習指導要領の移行期間は平成12年度中学入学生から適用であるため本学1年生の中学校入学年度は平成11年であり移行措置は適用されない⁽⁹⁾）。平成元年改訂学習指導要領は英語科に始めて「コミュニケーションを図ろうとする態度を育て」る指導が導入され、英語音声面の「言語活動」に関して昭和52年改訂学習指導要領と一緒に扱われていた「聞くこと、話すこと」が「聞くこと」と「話すこと」として独立して扱われるようになった。しかし「言語材料」に関しては昭和52年改訂学習指導要領の「言語材料」と全く変わらず、英語の単語レベルを超えた句や文に現われる英語音声面の特徴（音変化）に関する指導事項は入っていなかった。なお、必要に応じて授業に音声表記（発音記号）を使用し指導することができるようになった。

中学校学習指導要領第2章各教科第9節外国語（平成元年告示） （下線筆者）

第1 目標

2 内容

（1）言語活動

ア 聞くこと

主として次の事項について指導する。

（ア）語句や文の意味を正しく聞き取ること。

イ 話すこと

主として次の事項について指導する。

（ア）語句や文をはっきりと正しく言うこと。

別表 1 言語材料

ア 音声

（ア）現代の標準的な発音

- (イ) 語のアクセント
- (ウ) 文の基本的な音調
- (エ) 文における基本的な区切り
- (オ) 文における基本的な強勢

さらに、「言語活動」の「聞くこと」では、「語句や意味を正しく聞き取ること」となっており、英語音声の特徴への言及がない。昭和52年改訂指導要領から変化していない「別表1 言語材料」(イ) から (オ) は、英語の音声要素が英文の意味を担う要素 (suprasegmental) であることから、英語を聞くこと話すことには不可欠である。英文発音に生じる音変化は「(ア) 現代の標準的な発音」の中に英語の母音や子音の項に詳細に記載される必要があるが、指導項目として明示されなければ、教科書に反映されにくく、指導は教育現場に任せられることになり、結果は指導を受ける生徒の英語音声面にあらわれることになる。

平成11年度改訂英語科新学習指導要領の音声指導に関する「言語活動」の項に英語の音声の具体的特徴をとらえることの指導が初めて記載され、「言語材料」に音変化に関する事項が初めて記載された。

中学校学習指導要領第2章各教科第9節外国語 (平成11年告示) (下線筆者)

第1 目標

2 内容

(1) 言語活動

ア 聞くこと

主としてつぎの事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。

イ 話すこと

主として次の事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。

(3) 言語材料

- (1) の言語活動は、以下に示す言語材料のうちから、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。

ア 音声

- (ア) 現代の標準的な発音

(イ) 語と語の連結による音変化

- (ウ) 語、句、文における基本的な強勢
- (エ) 文における基本的なイントネーション
- (オ) 文における基本的な区切り

3 指導計画の作成と内容の取扱い

- エ 音声指導に当たっては、聞くこと及び話すことを重視する観点から発音練習などを通しての(3)の「ア音声」に示された言語材料を継続して指導すること。

また、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできること。

- キ 辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること。

本学1年生の高等学校1年入学年度は平成11年改訂新学習指導要領の移行措置期間である。高等学校学習指導要領外国語オーラル・コミュニケーションにおける英語音声特徴に関しては次のように、リズムとイントネーションのみで英文レベルの発音の音変化についての指摘がなく「中学校での音声指導を踏まえる」と、「リズム・イントネーションの音声的特徴に注意する」指導が必要という指摘のみである。

高等学校学習指導要領第2章第8節外国語（平成11年告示）（下線筆者）

第2款 各科目

第1 オーラル・コミュニケーションⅠ

1 目標

2 内容

(1) 言語活動

(2) 言語活動の取扱い

ア 指導上の配慮事項

- (1) に示すコミュニケーション活動を効果的に行うために、必要に応じて、次のような指導をするよう配慮するものとする。

(ア) リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴に注意しながら、発音すること。

「言語活動」の取扱いは、オーラル・コミュニケーションⅠのみならず、オーラル・コミュニケーションⅡ、英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語理解、生活英語、時事英語、リーディング、ライティング、総合英語、英語表現、コンピュータ・LL演習においても同様である。

2.3 学生の中学校高等学校における英文音声分野の具体的学習方法

実際に英語学習を受ける側にあった学生達の中学校高等学校の英語授業における英語音声面の具体的学習はどのようであったと感じているか、ALTの授業、英文発音聞き取りの困難点、英文発音の音変化の学習、音声表記（発音記号）の学校授業での学習、新出単語の発音法の学習方法などに関するアンケートの結果は以下のようになる。

3. あなたは中学高校英語授業でALTの先生が話すことがどのくらいわかりましたか？（選択肢）

・大体分かった	17%
・半分位分かった	16%
・すべて良く分かった	11%
・わからなかった	2%
・記述なし	54%

4. ALTの先生が担当した授業内容はどのようなものでしたか？（自由記述）

	中学	高校
・英語を使用したゲーム	80%	50%
・歌		6%

その他（中学）英文を読んだ、VTRを観た、簡単な会話、クイズ

（高校）洋楽の聞き取り、ライティング、発音、教科書の読み上げ、外国の慣行行事解説

5. ALTの授業であなたは一人で英語の発言をどのくらいしましたか？

	中学時代	高校時代
・毎時多く発言した	16%	8%
・時々発言した	30%	27%

- ・あまり発言しなかった 38% 29%
 - ・全然発言しなかった 16% 36%
6. あなたが、英語リスニングで「わからない」と感じる時は何が原因だと思いますか？（選択肢）
- ・英語がくっついて聞こえて単語を判別できない 75%
 - ・それぞれの単語は判別できるが、単語の意味がわからない 21%
 - ・単語は判別でき単語の意味もわかるが、全体の意味がわからない 4%
7. 英文の発音で英語がくっついたり、聞こえなくなる発音方法について高校時代までに教えてもらいましたか？教えてもらった場合には具体的に書いてください。（選択肢一部自由記述）
- ・教わった 61%
- 具体例：縮約（I'll, there are）
同化（don't you, need you, can you, have to）
連結（have a, in a, take about, get on）
- ・教わらなかった 32%
 - ・記入なし 7%
8. あなたは英語のくっつく発音や聞こえなくなる発音をうまくすることができますか？（選択肢）
- ・自然にうまく身についているのでできる 2%
 - ・注意すればできる 75%
 - ・どのようにするかわからない 21%
 - ・記入なし 2%
9. あなたは高等学校までに学校で英語の発音記号を教えてもらいましたか？教えてもらった場合は具体的に書いてください。（一部自由記述）
- ・発音記号を教えてもらったことがある 53%
- 高等学校で教えてもらった 81%
中学校で教えてもらった 19%
- 具体的内容：記号を見ながら、先生（モデル）の発音を聞いて皆で繰り返した
記号と口の動かし方を教えてもらった（4名）
教えてもらったけれどよくわからなかった
- ・発音記号を教えてもらったことがない 40%
10. あなたは新出英語単語の発音をどのようにして覚えしましたか？（自由記述）
- ・先生やモデルの発音を聞いて覚えた 87%
 - ・自分で辞書を調べて 9%
 - ・記入なし 4%

上から明らかになる学生の英語学習の実態は、中学校高等学校で何らかの形のA L T活用授業で情報取得を前提とした英語のコミュニケーション授業を体験している。しかし、A L Tの話す英語の理解が不十分の感じが残り、また、A L T活用授業内容はクラス全員の一人一人とのコミュニケーションが十分に意図されず英語の発音の経験があまりなかったこと、英語新出単語の発音を音源（C Dや教師などのモデル）にたよって学習していた傾向が大きく、音声が表示されないと学生各自が自分で英語音を創出することが困難であること、発音記号の指導を受けているが、その方法は教師やモデルの発音を真似て発音するというもので、発音方法の具体的な調音的説明を受けていた者は非常に少ないこと、英文発音の音変化に関しては学生が覚えて

いる限りの例には「くつつく」変化をする縮約、連結、同化が入っているものの、現実によく現われる「聞こえなくなる」音変化の弱化や脱落の言及がない。この実態は、英文発音の音変化の発音と聞き取りが困難で、一人で英文（新出英文）を英語らしく発音することにも困難を感じる人が多いことが予想され、1.1のアンケートに見られる英語の苦手分野が音声面であることの原因の一部が解明されたことになる。

3. 英語調音音声学的視点の導入授業実践：内容・方法・効果

3.1 授業内容とコンピュータ利用教材

コンピュータ教材を使用した英語音声面に関する4回の授業は次のように実施し、授業の最初に4回の授業の進行の説明をおこない、発音練習した英文音変化を4回目の授業時間に一人ずつVTRで音声録音すること、7月最終講義日に実施するテストに聞き取り問題を出題すること、授業は4回のみであり英文聞き取りと音変化習得には授業外練習が不可欠であることから、次週までに最低3回の英文音変化取得授業外練習を義務づけた。

授業内容

生活創造学科	保育科
第1回 英語発音の調音音声学の解説と発音練習	学内LAN受講者登録
第2回 リスニング、シャドーイング、追加解説	英語発音の調音音声学の解説と発音練習
第3回 リスニング、シャドーイング、追加解説	リスニング、シャドーイング、追加解説
第4回 VTR使用による発音録音と確認	VTR使用による発音録音と確認

英語調音音声学的説明として強調した事項は、英語特有の子音結合、英語音の発音プロセスがその英語音と似たような日本語音とはかなり異なったものであり、ノーマルスピードの英文では英語子音発音メカニズムから様々な音変化が生じるがこの現象はゆっくり発音すると生じないため発音練習にはノーマルスピードのシャドーイングが必要であること、これを発音記号、発音器官図、母音発音表を使用して解説し、具体的に一人ずつヘッドセットを使用して、コンピュータ教材（ALC NetAcademy 初級中級コース TOEIC®問題Part Ⅲ会話文）を利用し、モニタ画面に出る英文の文字と英文の音声変化を確認しながら、スピードを三段階に変化させて、一斉に実際の発音練習をおこなった。英文の音変化の具体的現象を高等学校までの授業で音声聞いて経験し、約半数の学生は発音記号の学習経験があることから、具体的な記号と発音方法に関する説明を含む音声の体系的説明に関して理解に困難点は見られなかった。4回の授業に説明できる具体的英文例を使用した調音音声学的説明は教材の第1課に関してのみであり、残りの課は学生各自がそれぞれの英語力に合わせてコンピュータ実習室が開放されている時間に学習練習することとした。コンピュータ利用教材は、受講学生各自が自分の進度に従って操作進行可能であるためクラス内の学生の英語学力に差がある場合でも学生主体（learner-centered）の授業が可能であるという点で、「英語の正しい使い方」を学習させるテキスト中心（text-based）授業での活用度が高い。

保育科に関しては「英語コミュニケーションⅡ」も必修であり1年間合計8回の授業になるため、英文科「英語発音演習」で使用している発音教本と同一教本⁽¹⁰⁾を使用し、発音方法を

視覚に訴える発音記号と関連づけて英語発音の調音方法解説説明の定着を図った。

3.2 授業方法：ブレンデッド・ラーニング

授業方法は、コンピュータ教材を使用した教室における講義・演習の授業と、学生各自が自分の進捗に合わせておこなうコンピュータ実習室を利用した授業外学習を統合化させたブレンデッド・ラーニングの方法をとった。eラーニングは、学生が自分の理解度に応じて学習を進め、自己診断をおこない、その結果について教員の指導を適時うける学習者主体の学習スタイル⁽¹¹⁾である。受講学生の英文音変化発音練習の自己診断には毎時の受講カードを利用し、質問等も受け付けることにした。コンピュータ教材は本学情報システムセンターに依頼し、年度はじめに4室のコンピュータ実習室に教材を設定していただき、コンピュータ実習室で授業開始前にヘッドセットを使用してリスニング授業のために、各コンピュータの音量を上げる方法ととった。学内LANで管理運営される教材の受講学生による学習状況と学習履歴を担当者が確認することができる。英会話文の音声変化の定着目的に、学生の授業外学習に関しては、次週までに3回（同一日ではなく、1回の練習時間は最低10分間）の練習を義務づけ、授業担当者が学習状況を学内LANを利用して学習履歴確認をおこなうことを前もって学生に知らせ授業外学習を徹底した。

3.3 授業評価と授業効果

4回の授業と授業外学習によって英文発音変化の実際の聞き取りと発音習得の受講学生の評価は、毎回の授業時に実施する課題結果と授業に対するカード記入と、4回目授業時間に実施したVTR録音による学生の実際の発音と学期終了時実施の教材範囲から出題の書き取りを含む聞き取りペーパーテストの外的評価と、受講学生各自の「このコースの目標が達成されたかどうか」に関する自己評価⁽¹²⁾をアンケート形式で合わせておこない、結果は次のようになった。

1. この授業を受けて英語に自信ができましたか？

・ ついた	35%
・ 少しついた	19%
・ つかなかった	31%
・ 記入なし	15%

2. この授業で効果があったと思うのはどのようなことですか？

・ 発音の仕方	37%
・ 英文の聞き取り	20%

その他：会話を聞き自分で（頭で）訳すくせがついた、英語のスピードに慣れた、英語の学習時間が増えた、人前で英語が読めなかったが大きな声で読めるようになった、外人の先生の話しが理解できるようになった、もっと勉強が必要だと思うようになった、英語らしく話すことに自信がついた、発音の仕方が正しくわかった、英語が嫌いだったが興味が持てるようになった

英語発音調音音声学の視点導入の結果、授業時に記入の自己評価カード及びアンケートに英語音声分野に関する学生自身の習熟の実感を獲得していることがあらわれており学生が自信を持てずに苦手と感じていた英語音声分野の発音に関するリメディアル教育の効果があったと考えられる。聞き取りに関しては英語音声のみが聞きとれても、意味がわかるためには、英文法、語意力が関係することから、それらの分野のリメディアル教育の方法の必要がある。

4. 結論

本学女子短期大学部共通教育「英語コミュニケーションⅡ」（受講学生は英文科を除く全学科生）におけるテキスト中心授業（英語運用能力養成授業）において、調音音声学の解説講義による授業と英文の発音およびリスニング習得を目的としたコンピュータ教材を使用した授業外自己学習（eラーニング）を組み合わせた授業（ブレンデッド・ラーニング）が、学生の英語音声分野教育支援要素として効果を持つこと、特に、英語発音の調音音声学の解説により学生が具体的英語発音法を理解し英語発音プロセスの理解に基づく実際の英語発音が可能になることによって、英語音声表現に自信を持てるようになり、英文レベルの発音練習という目的と必要学習時間を明示した授業外学習を経験することにより学生の英語音声分野に関する習熟の実感が獲得でき試験範囲を暗記するだけの英語学習方法から積極的自己学習態度の改善に効果があることが認められた。これは大学教育における専門教育分野に必要とされる多量で高度な英語力養成の前提となる英語リメディアル教育としては全く充分といえるものではない。しかし英語を自ら学ぶことができる態度の養成面での基本的リメディアル教育効果としては重要であると考えられる。これを基礎として、専門教育に必要とされるさらに効果的な英語リメディアル教育の方策が必要となる。

註

- (2) 本稿は、本学2005年度前期「英語コミュニケーションⅠ」授業実践内容に文部科学省補助事業岩手県教育委員会主催「平成15年度英語教員研修第1回」（2003年）に於ける講義（勝畑）と、アルク教育社主催「学内LAN&CALL英語教材ワークショップ」（2005年東京）に於ける講演内容を加筆したものである。
- (4) 斉田智里は、平成元年度改訂学習指導要領の影響と考えられる高等学校入学者の英語学力低下に関して1995年から2005年の茨城県内県立高等学校1年次生徒全員を対象とした調査結果を報告している。（平成10年度版学習指導要領実施効果の一検証——2002年度前後の高校入学時の英語力変化に着目して—— 斉田智里 第44回（2005年度）JACET全国大会要綱 238頁） 斎田の指摘による、高等学校入学時に英語力に変化を生じたと感じられる生徒が今年度（2005年）の大学入学生になっている。
- (5) 音声学の分野には、調音音声学（articulatory phonetics）の他に、聴覚音声学（auditory phonetics）、音響音声学（acoustic phonetics）がある。
- (6) コミュニカティブ授業の条件に関するジョンソンの指摘は、①教室での活動を完了するのに密度の濃い個人間の相互作用を必要とすること②教室での活動が「正しいテキストを作ること以上のこと」を目的としていること③教室運営活動が学習対象の言語でおこなわれること。『コミュニケーションな英語授業のデザイン』井上和子監修 フランシス・C・ジョンソン著 平田為代子訳 大修館書店 2000年、86頁
- (7) The Cambridge Encyclopedia of The English Language Second Edition, David Crystal, Cambridge University Press, UK, 2003, p.236
- (8) 岩手県中学高校英語教員研修会におけるALTの英文における音変化に関する反応にもこのことが表われていた。
- (9) 『新中学校教育過程講座＜外国語＞』平田和人著、(株)ぎょうせい、2002年、144頁
- (10) 使用教材は、A DRILL BOOK ON PROSODY —— 女子短大生の英語発音教本 —— 勝畑田鶴子著 プリントコープ 2005年。
- (11) 『eラーニング白書 2005/2006年版』経済産業省商務情報政策局情報処理振興課編 (株)オーム社 平成17年、5頁～9頁
『教育改革を目指したeラーニングのすすめ』 社団法人 私立大学情報教育協会 平成17年、1頁
- (12) 語学学習の評価に関して、フランシス・C・ジョンソンは「学習者に自分自身と仲間の評価をさせるというのは新しい考えである。」として「自己評価の概念」の由来に関して、1970年代のヨーロッパ評議会（the Council of Europe）に言及し、Oskarsson（1978）による自己評価の基本的考え方と、自己評価の信

頼性に関する Rolffe (1990) の考え方の重要性を指摘している。「自己のコミュニケーションの有効性に関して、信頼でき妥当な判断を自主的に下せるように学習者を教育することが、学習過程において必要である。(Oskarsson 1978)」 「学習者の推測は、単なる推測ではない。それは、学習者の直観であって、さまざまな要因によって影響され調和され、彼等の英語の能力と母語の能力を比較することによって磨かれたものである (Rolffe 1990)」 『コミュニケーションな英語授業のデザイン』 井上和子監修 フランシス・C・ジョンソン著 平田為代子訳 大修館書店 2000年、160頁

参考文献

1. Collins; Beverley and Mees, Inger, M. Practical Phonetics and Phonology, Routledge, London, 2003
2. Crystal, David, The Cambridge Encyclopedia of The English Language Second Edition, Cambridge University Press, UK, 2003
3. Gimson's Pronunciation of English sixth edition Revised by Alan Cruttenden, Arnold, London, 2001
4. Graham, Carolyn, Jazz Chants Old and New, Oxford University Press, UK, 2001
5. 平田和人 新中学校教育課程講座＜外国語＞ (株)ぎょうせい 2002年
6. 井上和子監修 ジョンソン, フランシス・C著 平田為代子訳 コミュニカティブな英語授業のデザイン 大修館書店 2000年
7. 外国語教育推進協議会委員 勝畑田鶴子・馬場熙、尚綱女学院短期大学共通教育外国語教育実践報告(1) —— 学科横断的授業運営の試みと学内ネットワーク利用英語共通教材の導入 —— 尚綱女学院短期大学研究報告 第49集、2002年
8. 勝畑田鶴子・馬場熙、尚綱女学院短期大学共通教育外国語教育実践報告(2) —— 学内ネットワーク利用英語共通教材仕様による shadowing の効果について —— 短期大学部学生が備えるべき英語力達成目標策定の試み、尚綱学院大学研究報告 第50集、2003年
9. 勝畑田鶴子 A DRILL BOOK ON PROSODY —— 女子短大生の英語発音教本 —— プリントコープ 2005年
10. 斉田智里 平成10年度版学習指導要領実施効果の一検証 —— 2002年度前後の高校入学時の英語力変化に着目して —— 第44回 (2005年度) JACET 全国大会要綱238頁
11. e ラーニング白書 2005/2006年版 経済産業省商務情報処理振興課編 (株)オーム社 平成17年
12. 教育改革を目指したe ラーニングのすすめ 社団法人 私立大学情報教育協会 平成17年
13. 中学校学習指導要領 (平成10年12月) 解説 —— 外国語編 —— 文部科学省 東京書籍株式会社、平成16年
14. 高等学校学習指導要領解説 外国語編英語編 文部省 開隆堂出版株式会社 平成11年
15. 文部科学省検定済中学校外国語科用教科書 SUNSHINE ENGLISH COURSE 1～3 平成17年 開隆堂出版株式会社
16. NEW HORIZON ENGLISH COURSE 1～3 平成17年 東京書籍株式会社